

『へき地・複式教育実習フォーラム in かつらぎ』

この「へき地・複式教育実習」を発案したひとりとしてご挨拶申し上げます。

私は、1977年に和歌山大学に着任して以来、和歌山の教育の推移に同伴してまいりました。10年位前になるでしょうか、和歌山県の教育政策、教育行政が全国の潮流に飲み込まれて、和歌山という地域の蓄積の大事さを見失っているなという感じがいたしました。そのことを、当時の教育長とも話をしたことがあります。「和歌山という地域でこそ人は育つ」、このことにもっと確信を持って取り組む必要があるのではないかという趣旨の話です。

意見は分かれたところもありますが、その時に私が強く申し上げましたのは、複雑な経緯のある青年が大学に入学し、地域の中にある学校で教師をしようとするわけですから、教師もまた地域で育てる必要があるのではないかということです。教育実習などいろいろ工夫されておりますが、特に和歌山大学での工夫を考える場合、地域の中でホームステイをして地域の中で育てられるという教師の養成手法も必要なのではないかという話をいたしました。

教育長もそれはいいなあと同意されまして、和歌山県の方での手配と支援をしていただきました。丁度その時期、本学では現教育学部長の松浦教授が教育実習委員長をしており、教育学部の方の制度設計をしてくださいました。私はそのとき教育学部を離れ、生涯学習教育研究センターにおりましたので、実際には、当時の教育学部長、そして松浦教授など教育学部の教員、職員が苦勞されたわけです。またかつらぎ町の皆様には最初からいろいろご協力いただいております、ここで改めて感謝申し上げたいと思います。

また、昨日、知事と教育問題について話すテレビ番組の収録があり、その中でもこの取り組みについてお話をしましたが、和歌山大学は、和歌山という地域で教員を育てるという考えで取り組んでいるということを強く申し上げましたところ、知事もそれは和歌山県にとってもうれしいことであるというふうに言われていました。

私は、要するに人が育つというのはいっさいの教育学的な知識を捨象していえば、群れの中で人間が育ち、その中でいろいろなトラブルがあるからこそ学びや創造の意欲がわくという単純なことだと思っています。しかし、現代の人間の形成過程では、群れというものをいっさい経験することがなく、狭い家庭と非常に貧弱な地域の中でしか育ちません。従って人間関係力が脆弱なのは当たり前のことです。あるいはトラブルをまったく経験しない生活でありますので、トラブルに弱いのはもちろんでありますし、学ぶ意欲があまりない、これも当然のことであろうと思います。そういう意味でいいますと、18歳で入学してきた学生たちにそういう経験を改めて提供することも大学の責任ではないかと思っております。その点では大学だけではなく、大学の外の地域の方々にも大いにご協力、ご参加をいただいで初めて成り立つ教育の仕組みであると思っております。

幸い、和歌山県は、豊かな人情と地域の活力がありますし、学校で奮闘されている先生方も多くいらっしゃいます。あるいはそれを支えている地域の方々もおられます。

そういう中で本学の学生が学ぶ場を得ることができましたことをたいへん嬉しく思いますとともに、ご協力いただいております皆様方に改めて深く感謝いたしまして私のご挨拶とさせて頂きたいと思っております。

平成22年3月2日

国立大学法人和歌山大学

学長 山本 健 慈